

ずいそう

時間と空間をつなぐ ～宿布発電所跡整備事業

樋口 靖



福井の街に、初めて電気の明かりが灯ったのは、1899（明治32）年のことだ。

その電気は、福井市郊外の足羽川沿いの水力発電所「宿布発電所」で作られた。運転当初の電力は80kW、わずか600灯の需要だったが、二年後には発電機を増設し、160kW、約3,000灯の需要に応えたと伝えられている。発電所の完成は、北陸では一番早く、送電は富山にひと月遅れて二番目だった。

宿布発電所は運用開始から57年間稼働し、1956（昭和31）年に老朽化のため廃止となった。発電所があった土地は、電力会社から地権者に返還され、遺構は埋め立てられて紀功碑のみが地上に残された。

福井県初の発電所の遺構は、私有地だったこともあり、半世紀以上にわたって土に埋もれ、人々の記憶から次第に忘れ去られていった。

その歴史的な遺構を掘り出し、次世代に残し伝えるため、公園として整備したのが福井を発祥の地とする熊谷組だ。熊谷組が、この遺構を公園として整備したのにはわけがある。

いまからおよそ120年前、京都電燈(株)から宿布発電所の導水路や貯水池の石積工事を請け負ったのが、熊谷組の創業者で、初代社長の熊谷三太郎だった。彼が27歳のときのことだ。

当時、福井では足羽山から産出される柔らかくて加工に便利な笏谷石が多用されており、発電所の水路に使うような頑丈な堅石を扱える石工はいなかった。敦賀の叔父の下で石工として修業を積んだ彼は、福井では堅石の加工ができる腕を持つ、数少ない石工だったのだ。京都電燈は、福井市内での人探しに三日かけ、ようやく三太郎を探しあてたという。三太郎にとって、すなわち熊谷組にとって、宿布発電所が初めての請負工事であった。

一般にはほとんど知られていない宿布発電所だが、熊谷組の社員には、その名を知らない者はいない。新入社員研修の社史を学ぶ過程で、創業者の名前とともに、創業の工事として必ず教えられるからだ。毎年、夏になると、北陸支店や福井営業所の社員は地権者の

同意を得て、遺構が埋もれた紀功碑の周辺の草刈りをボランティアで行っていた。

そして、創業120周年を迎えた2018（平成30）年。熊谷組のルーツを整備する記念事業の一環として、120年前の水力発電所の遺構を次世代に伝え残すべく、熊谷組の手による宿布発電所跡整備事業が計画された。

整備内容は総面積1,623m²（491坪）、貯水池と余水吐の発掘、水車・発電機設備の展示建屋1棟と駐車場・芝生広場の建設だ。

水車は発電所の運転開始から設置されていた120年前のもの。発電機は1914（大正3）年に取り換えられた日本製で、これも100年以上前の貴重なものだ。

水車・発電機設備は、発電所の廃止にともなって地元高校の電気科の教材として引き取られていた。同校の電気科が廃止になったあとは、1989（平成元）年に校舎の建て替えで廃棄される寸前のところを熊谷組が発見し、北陸電力(株)に譲渡されて大切に保管されていた。

120年前の水力発電所の遺構と、当時の水車・発電機設備が現存する全国でも稀有な例でもあることから、熊谷組のメモリアルというよりも、土木遺産・電力遺産として大変に意義のある事業となった。

幸い、5名の地権者をはじめ、地元のみなさんには事業に賛同をいただき、土地を譲り受けることができた。北陸電力からも水車・発電機設備の寄贈の快諾をいただいた。そして、行政機関からの指導と協力もあって、2019（令和元）年に宿布発電所跡公園は無事完成した。

1950（昭和25）年に宿布で生まれ、いまもそこに暮らす自治会長が、公園の完成後にこんな思い出を話してくれた。

発電所の貯水池へ揚水するための導水路を子供たちは「電気の川」と呼んでいた。そこで近所の仲間たちと、魚釣りをして楽しんだ。

半年から1年に1回、点検や清掃のために貯水池の水が抜かれると、たくさんのモクズガニが獲れるため、町内が浮き足立った空気になったという。

発電所の従業員は近所のおじさんで、発電所の中を

見せてくれたこともある。黒く大きなモーターとベルトが轟音を響かせながら勇壮に動く様子と、おじさんが話した「こんな大きなの、見たことないやろ」という自慢気な言葉は、今でも鮮明に覚えているという。

そのときに彼が見た発電機設備は、62年ぶりに元にあった場所とほぼ同じ位置に設置された。

子供の頃に親しんだ遊び場が、60年以上の時を経て目の前に再び姿を現したのだ。それは感無量の懐かしさであったに違いない。

「電気の川」とはなんとも絶妙なネーミングだが、そんな彼も子供の頃の遊び場が、福井で初めて電気を供給した、郷土史に残る場所だったとは露ほども知らなかったという。

いま、公園の広場の一角には、一本の柚子の木がある。発電所跡を整備するにあたって、地元の人たちの要望で残されたものだ。これもまた、発電所に親しんだ、地域のみなさんの思い出なのだ。

近年、全国各地でこうした歴史的な遺構や文化財の復元・整備工事が増えている。しかし、現在の安全基準や法規制などによって、当時の図面や古写真などの史料に基づいた忠実な復元が困難な場合も多い。

一旦、取り壊されてしまった遺構は、二度と元には戻らない。

そういう点では、発電所の廃止後に遺構が破壊されることなく、数十年にわたってタイムカプセルのように地中で眠り続けていたことは、まさに幸運としか言いようがない。

掘り出された石積擁壁の積み石には、タガネにゲンノウを振り下ろした当時の石工たちの息吹が刻み込まれている。その石積みには、魚釣りをして遊んだ子供たちの目に見えない足跡が残っている。それは絵図面や古地図を基に、どんなに忠実に復元しようとしても復元できない、時間と空間を超えて感じる事ができる人々の生きた証だ。

遺構は熊谷組が公園として整備したあと、福井市に寄贈された。現在は、「福井市宿布発電所跡公園」として、120年前の水力発電所と水車・発電機設備を自由に見ることができる。広々とした緑の芝生は、地域の人びとや訪れた見学者たちの憩いの場になっている。

こうした遺構や文化財の復元工事は、単に古いものを整備し、産業遺産や文化遺産として後世に伝えることにだけ意義があるのではない。地域・コミュニティの人びとの想いに応え、新たな価値を創造して社会に

お届けすることこそ意義がある。それが私たち建設業の仕事でもあるのだと、今回の整備事業を通してあらためて実感した。

今回の整備事業で現代に甦ったのは、貯水池と余水吐が中心である。子供たちが「電気の川」と呼んで親しんだ足羽川からの導水路は、いまでも地中に眠っている。古写真で見ると、川には石積みの小さなアーチ橋がかかり、なんとも言えない風情がある。

先の自治会長の話を聞いてからというもの、その古写真を見るたびに、私には石橋の上から釣り糸を垂れる元気な子供たちの姿が目につくのだ。



写真一 整備後の宿布発電所跡公園



写真二 展示館の水車・発電機設備



写真三 当時の宿布発電所導水路